

宮司 花山院弘匡さん

日本最古の芸能祭典を司る

奈良県の春日大社で毎年12月に行われる春日若宮おん祭。

平安時代末に始まって以来、応仁の乱のときも太平洋戦争のときも途絶えることなく続けられてきた

この壮大な祭礼で重要な役割を果たしているのが、松である。

神様が御降臨される際の依代となる松の木は、春日大社にとっては特別な存在なのである。

国指定重要無形民俗文化財

神護景雲2年(768年)に創建された春日大社には、武甕槌命様、経津主命様、天児屋根命様、比売神様という4柱の神様が祀られている。さらに61社にも及ぶ摂社・末社がある。その中でも比売神様の子どもよりしろの神様が祀られている若宮社は、本社格の摂社とされている。

その若宮のおん祭が始まったのは、保延2年(1136年)のことであった。関白の藤原忠通が天下泰平、五穀豊穰、万民和楽を祈り、大和の国を挙げて行ったのが始まりとされている。それから900年近く、若宮のおん祭は中断されることなく続けられてきた。今、この祭礼は国指定の重要無形民俗文化財となっている。

「平安時代末、長雨の影響で農作物が不作であったとき、藤原忠通公によりおん祭が斎行されると、長雨がやんだと伝えられています。京都の大きな祭は、100年の大乱である応仁の乱のときにほとんど途絶えました。そのときにもおん祭は続き、さらにそれ以前の南北朝の戦いのときにも

行われ、南朝と北朝双方の武士も参加したとの記録があります」と花山院弘匡宮司はそのように解説された。

おん祭は7月の流鏝馬定から始まるが、最大の見どころは12月17日の遷還、お渡り式、お旅所である。午前0時からの遷幸せんこうの儀で始まり、午後11時頃の還幸かんこうの儀まで丸1日にわたってさまざまな神事が繰り広げられ、沿道には10万人が訪れる。遷幸の儀とは、若宮様がお宮御殿から1km程隔たれたお旅所まで御遷座される儀式で、還幸の儀は、若宮様がお旅所から御本殿に帰られる儀式である。若宮様にお旅所で宿泊して頂くのは失礼なため、遷幸の儀と還幸の儀は日をまたぐことなく24時間以内に行わなければならない。

すべて松材でつくられる御仮殿


若宮様がお遷りになるお旅所には、御仮殿が建てられる。御仮殿は皮付きの松の柱に、青松葉で屋根が葺かれるもので、すべて松の木でつくられる。かつては毎年、約1,700本の新

しい松材が使われていたが、今は10年くらい同じ松材を使う。若宮様がお入りになるところは清浄でなければならぬため、御仮殿は毎年おん祭が終わると解体される。松材はきちんと保管され、翌年のおん祭でまた組み立てられるのである。

ちなみに解体や組み立ては天保元年(1830年)創立の建築会社、尾田組によって行われるのが習わしである。

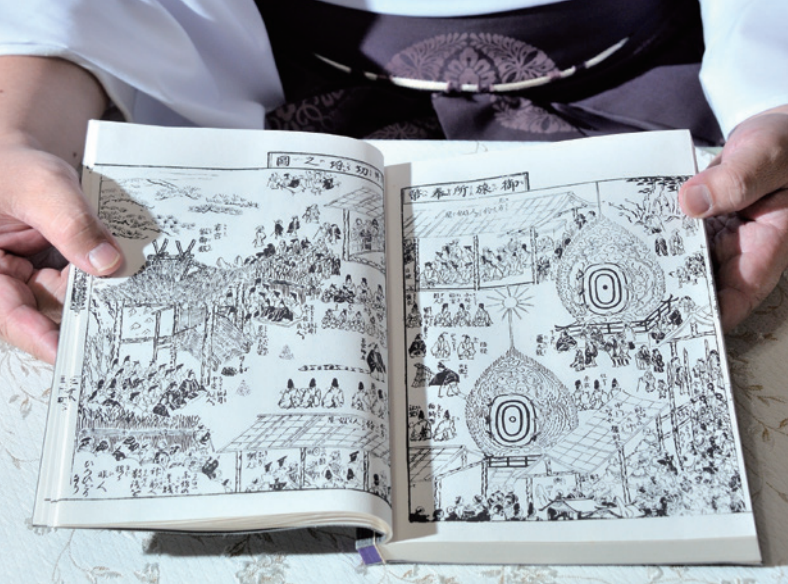
それにしてもお旅所はなぜ松でつくられるのか。花山院宮司に尋ねると、こんな答えが返ってきた。

「神様が降りてこられるのは基本的に常緑樹です。神道では自然から恵みを得て命をつなぎ、幸せな時間を過ごし、子や孫へ命が繋がっていくことを神様が御加護されるのです。常に青々とした葉の緑は、神様が自然の中で力を発揮している御様子なのです。ですから春日の山は平安時代から伐採が禁止されてきました。平安時代からの都市に原生林が残っているというのは世界的に希有なことです。春日大社の御神木は榊や杉ですが、門松のように松もまた神様の大変お好みの依代です。松は、神

A man with grey hair, wearing a white kimono and a black hakama with a circular pattern, stands in the center of the frame. He is positioned under a large, rustic wooden structure with a thatched roof, which appears to be under construction. The background shows a traditional Japanese building with a tiled roof and a large, leafless tree. The ground is a mix of grass and dirt.

かさんのいん ひろただ 1962年、佐賀県生まれ。國學院大學文学部神道学科卒。高校の地理担当教諭を経て、2008年より現職。先祖を47代さかのぼると、藤原鎌足に行きつくという。

宮司の背後には製作中のお旅所の御仮殿



(写真左上) 江戸時代発行の書物。お旅所の場面。(左下) 御仮殿の前で舞われる萬歳楽。鳳凰が萬歳と唱えるのを舞いに表したものとされている。(右上) 建設中の御仮殿。(右下) 藤原忠実の命で建てられた若宮御本殿。

降ろしを待つという意味にも通じています。

春日大明神が特別にお好みの松があります。それが一之鳥居をくぐってすぐの参道右側にあるのが影向の松です」

おん祭では午後からお渡り式が行われる。御仮殿の若宮様のもとへ神事芸能の集団など祭礼に加わる総勢千余名が列をなしてお参りへ向かうのがお渡り式である。現在は奈良県庁前を出発し、近鉄奈良駅やJR奈良駅前を経てお旅所前まで行くコースをたどる。

神が降臨した影向の松

そのコースの途中、影向の松の前に行列が差し掛かると行われるのが、松の下式という神事である。猿楽座や田楽座などがそれぞれの芸能を奉

納する。

「神様に喜んで頂くために芸能を奉じるのですが、900年近く続いているので、今ではここにしか残っていない芸能もあります」

と花山院宮司は話す。たとえば細男は、白い浄衣を身にまとい、顔の下半分を白い布で覆った6人の舞人が小鼓を打ち、笛を吹きながら舞う最古の舞のひとつである。筑紫の国で始まったと伝えられているが、平安時代には京都でも盛んに舞われていたものの、春日大社に残るのみである。

影向というのは、神様が一時的に姿を現すという意味で、つまり影向の松は、神様が降臨したと伝えられる松なのである。春日大明神が影向

した松は、延慶2年(1309年)の春日権現験記にも記されている。立派な影向の松は、残念ながら1995年頃に枯れてしまい、今は後継の若い黒松となっている。能舞台の背景には必ず松の木が描かれているが、それは能の源流である猿楽が春日大社の影向の松の前で平安時代より舞ったことに端を発している。

お渡り式の列がお旅所の御仮殿へたどり着くと、再びここで芸能が奉納される。これは「お旅所祭」と呼ばれる神事で、御仮殿の前には9メートル四方ほどの広さの芝舞台が設えられる。芝居という言葉は、芝の上に居て芸能を奉じるこの神事に由来しているという。

この神事は午後3時過ぎから夜の11時近くまで行われる。神楽、田楽、猿楽、細男、舞楽などの芸能が次々と奉納される様は、まさに日本の芸



写真撮影：野本暉房

能史を目の当たりにするような圧巻の光景である。

神とともに祭を見守ってきたもの

この後、御仮殿から若宮御本殿へと若宮様が帰られる還幸の儀が行われ、おん祭は幕を閉じる。還幸の儀も還幸の儀も、真っ暗闇の中で行われる。照明をつけたりカメラのフラッシュをたいたりすることは、一切禁止されている。神様の行列は、松明を持った人が先行するが、明るい中で神様にお遷り頂くのは失礼にあたるため、松明は火を下にして持たなければならない。松明の炎が参道を引きずるようにして先行するわけだが、そうすると参道の両側に熾火が点々と残され、地を清めるとともに、暗い中でも参道を過たずに進めるのである。

還幸の儀に先立ち前日に行われる宵宮祭。若宮神前に“御戸開（みとびらき）の神饌”を奉り、祭典の無事執行を祈る神事。その後、若宮御本殿は真っ白な御幌（とばり）で覆われる。

「暗闇の中で黙々と行列が進み、神職が『ヲー』という警蹕^{けいひつ}の声を発します。それはもう神様の世界であり、参列された方の中にはその雰囲気^{けいふき}に涙を流されるという方もいらっしゃいます」

そう語る花山院宮司は、おん祭の斎主として神事の際には祝詞を奏上する。そのために、おん祭に備え12月に入ってからは精進を続けるという。

近鉄奈良駅で電車を降り、春日大社に向かう。参道に入るとそこかしこに鹿がいる。周囲はうっそうとした森で、見れば松の木も多い。だが、数十年前には春日大社の森の松もだいぶ枯れたという。おそらくマツクイムシ（マツノザイセンチュウ病）の被害を受けたのだろう。病気になる

った木をそのままにしておくと被害が広がるので、やむなく相当な数の松を切ったという。

「鎌倉時代には一之鳥居付近は松林と呼ばれ、昔はもっとたくさんの松がありました」

遠くを見るような眼差しをして、花山院宮司が話す。

お旅所祭のお渡り式が雨で中止になったことはあるという。しかし、春日の若宮おん祭自体は、12世紀から21世紀にいたるまで途絶えることなく続けられてきた。その壮大で荘厳な祭礼を、神様とともに見守ってきたのが神様のお好みの松である。「松の木は、いつでも神様が降りてこられるのを待っています。戦乱に遭うことなく、春日の若宮おん祭がこの先も途絶えることなく続けられていくことを、神様へ願うばかりであります」